

# 2年3学期からの指導

## ～新高3生スタート学期としての意識づけ～

生徒が希望する大学への進学を実現するためには、大学受験を意識した学習を早期から計画的に行う必要があります。

以前から、高校2年の3学期を「3年0学期」と位置づけ、受験生としての意識を喚起したり、入試に向けた学習計画を立てたり、大学入試対策を始めたりする高校が多く見られました。河合塾も、この時期を「新高3生スタート学期」として指導に力を入れています。

さらに近年では、総合型選抜や学校推薦型選抜の拡大、大学入学共通テストの導入、学習指導要領改訂など、大学入試も大きく変化。低年次からの受験指導がますます重要になっています。

そこで本特集では、「新高3生スタート学期」としての高校2年3学期の指導について、取り組みを紹介します。

### CONTENTS

#### Part 1

#### 大学入試の変化と2年3学期の指導のポイント

➔ p6

- 重要性を増す「志望理由書」「面接」の指導
- 大学入学共通テストの対策を十分に
- 2年3学期までに受験対策を始める準備を

#### Part 2

#### 取り組み事例

➔ p10

- 埼玉県立浦和高等学校 ➔ p10
- 横浜市立金沢高等学校 ➔ p12
- 岐阜県立加茂高等学校 ➔ p14
- 兵庫県立加古川東高等学校 ➔ p16
- 河合塾 ➔ p18

## 大学入試の変化も踏まえて指導内容・スケジュールを再検討

Point

- ✓ 重要性を増す「志望理由書」「面接」の指導
- ✓ 大学入学共通テストの対策を十分に
- ✓ 2年3学期までに受験対策を始める準備を

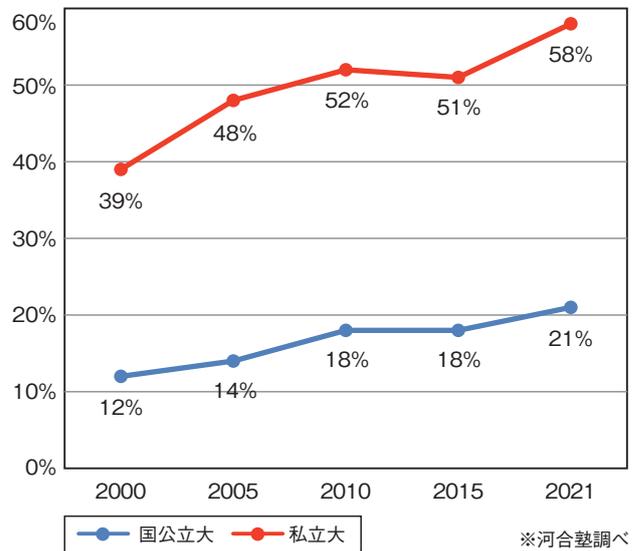
### 総合型選抜・学校推薦型選抜の拡大 重要性を増す「志望理由書」「面接」の指導

近年、総合型選抜・学校推薦型選抜（以下、総合・推薦型選抜）を選択肢として考える生徒が増えているのではないかと。＜図表1＞は大学入学者に占める総合・推薦型選抜の割合を表したものである。その割合は国公立大、私立大いずれも年々増加している。

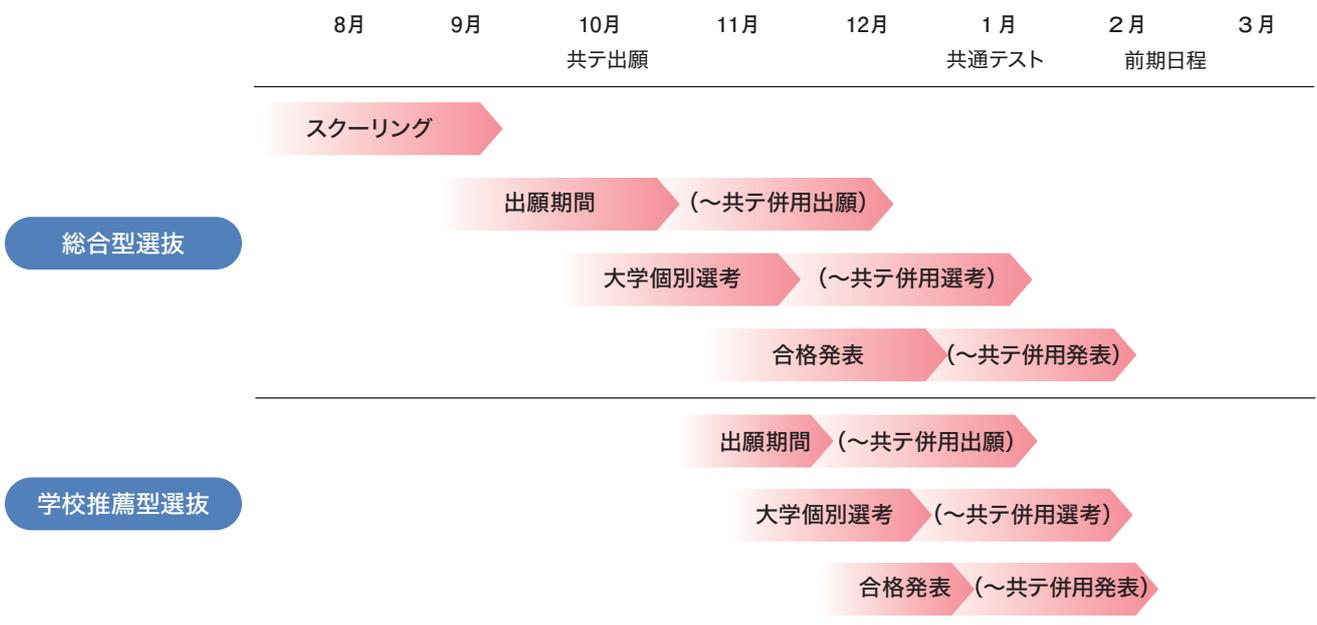
総合・推薦型選抜では、志望理由書や活動報告書などの出願書類のほか、面接・小論文が課される場合が多い。さらに、近年は一般選抜でも志望理由書や面接を課す大学が増えている。

志望理由書や面接では、自己理解を深め志望理由を明確にした上で、わかりやすく表現することが必要である。

図表1 大学入学者に占める総合・推薦型選抜の割合



図表2 国公立大の総合・推薦型選抜のスケジュール



※河合塾作成

そのため、総合的な探究の時間やキャリア教育とも関連づけながら、早期から取り組むことが求められる。特に、総合・推薦型選抜の志望者が多い学校では、これらを個別対応ではなく全体指導の中に位置づけていくことも有効である（Guideline2023年2・3月号「総合型選抜・学校推薦型選抜の指導のポイント」参照）。

<図表2>は、国公立大の総合・推薦型選抜の一般的な選考スケジュールを表したものである。総合型選抜は9月から出願受付をしており、一般選抜の出願の時期（1月下旬～2月初旬）と比較して5カ月ほど早い。

大学受験に向けた指導も、総合・推薦型選抜の選考時期から逆算した指導スケジュールを設定することが求められる。

### 大学入学共通テストへの移行 問題演習量の確保が重要に

2021年度入試より大学入学共通テスト（以下、共通テスト）がスタートした。共通テストでは「知識・技

能」だけでなく、それらを活用した「思考力・判断力・表現力」がこれまで以上に問われている。

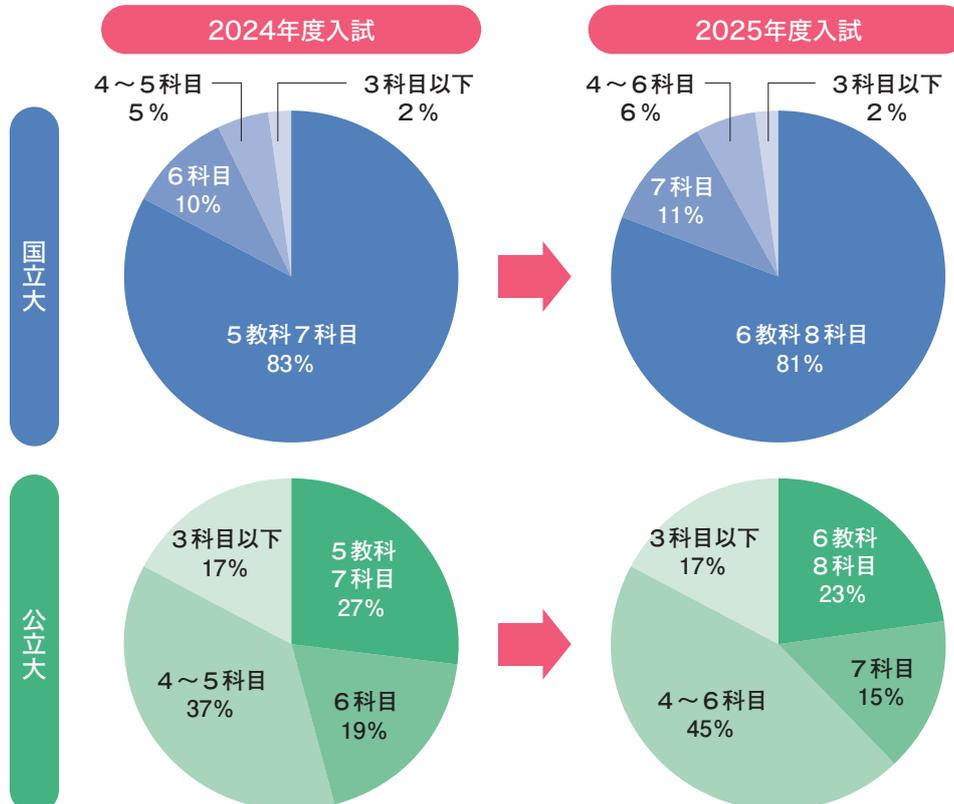
共通テストでは、複数の資料やグラフ、データから適切に情報を読み取る設問や、複数の文章や資料を題材として深く考察する力が求められる設問も見られる。また、資料の増加に伴い、全体的な分量も増しており、限られた時間内に多くの情報を処理する能力が求められている。

選択肢も「誤りを含むものはない」「両方とも当てはまらない」など、より偶然の正解がしにくい形式が見られるようになった。こうした変化に戸惑い苦勞する生徒も多いのではないか。

これらの出題内容・出題形式に慣れるためには、問題演習量を十分に確保することが求められる。

さらに、2025年度からは「情報Ⅰ」が出題され、共通テスト利用教科・科目数を増やす大学が多い<図表3>。これまで以上に、共通テストに向けた指導を計画的に行う必要がある。

図表3 国公立大 共通テスト利用教科・科目数の変化



※河合塾調べ（2025年度入試の数値は2023年8月末現在、大学公表の募集区分に基づき一般選抜前期日程で集計）

## 高校における指導のポイント

### 2年3学期までに受験対策を始める準備を

現状でも多くの高校が、大学受験を意識した指導を2年次までにスタートしているが、先述のような変化を背景に、今後は低学年からの指導がさらに重要になる。

そこで今回は、本格的に受験学年を迎える前の準備として、2年次の3学期の指導に注目して取材した。各校とも、受験への意識を高めるとともに、志望理由の明確化、基礎学力の定着、学習習慣の定着などの指導を行っている<図表4>。

#### ①受験生としての意識づけ

- 2年次の2～3月にかけて行われる入試問題研究会を通じ、学年全体で入試に向かう雰囲気を醸成（浦和高校）
- 全統共通テスト高2模試の受験により、大学受験への意識を高める（加茂高校）
- 2年次12月に「3年0学期集会」を行い、受験生としての心構えを伝える（金沢高校）

#### ②志望の明確化

- My志望理由書を全員が作成（金沢高校）
- 2年次2月に行われるSSH発表会により、大学での学びへのモチベーションアップ（加古川東高校）

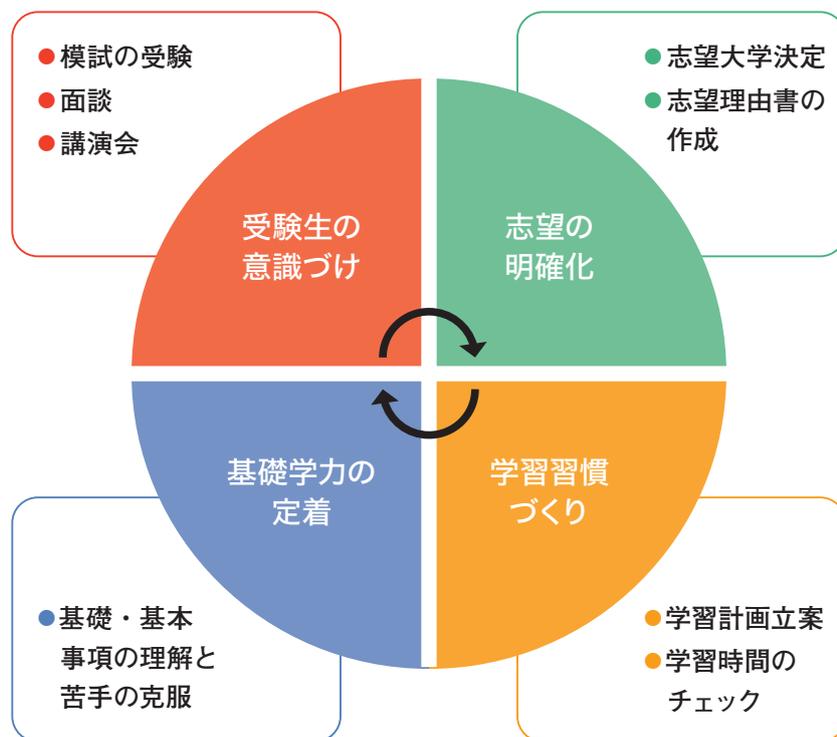
#### ③学習習慣づくり

- 学期ごとに「学習状況調査」を行い、面談を通して学習習慣が定着しているかを確認（浦和高校）
- 2年次3学期を「受験学年としての自覚を持ち、入試に向けた学習計画をスタートさせる時期」と定め、学習計画・学習実行状況を面談等で確認（河合塾）

いずれの高校も、1・2年次の初期指導を重視しており、それに加え、2年次3学期という受験学年を迎える手前のタイミングで生徒たちの気持ちが受験に向くような取り組み行っていた。

具体的な取り組み内容は、それぞれの事例のページをご参照いただきたい。

図表4 2年3学期の指導のポイント



※河合塾作成

Column

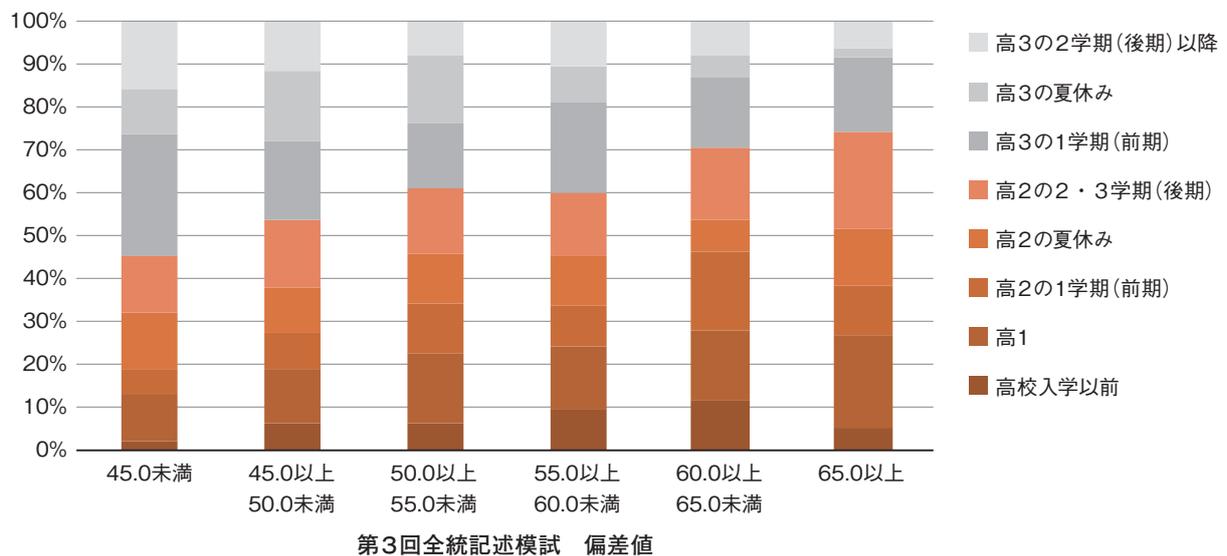
## 全統模試成績上位層ほど 志望校決定、受験勉強の開始が早い傾向

最後に、志望校決定の時期、大学受験を意識した学習を開始する時期と、模擬試験の関係を紹介する。

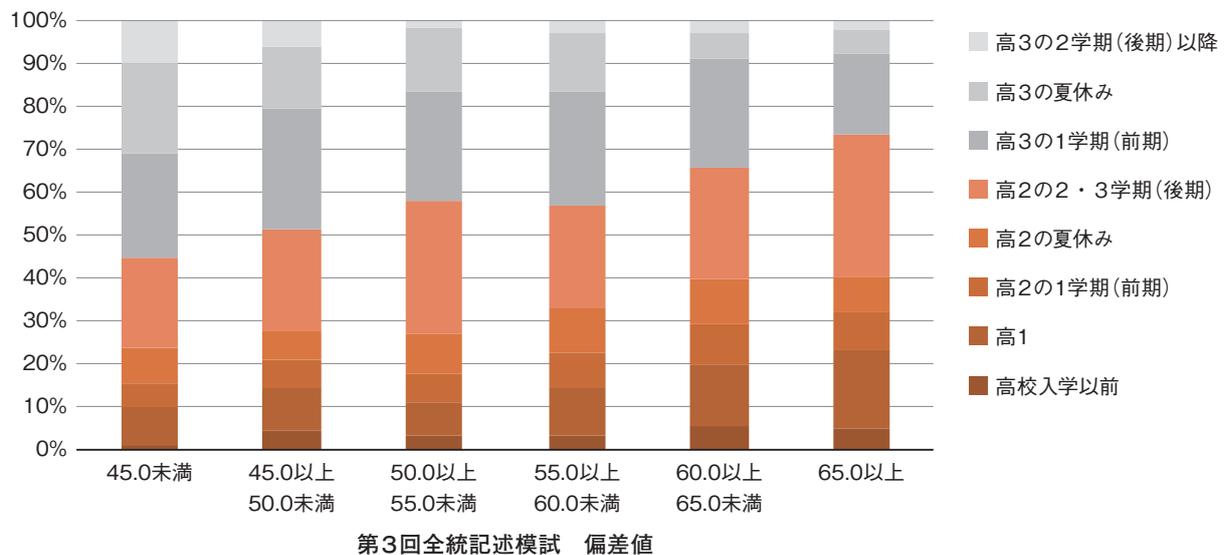
<図表5><図表6>は、2022年度に河合塾に通っていた高校3年生に関するデータをまとめたものである。これを見ると、第3回全統記述模試（3年

10月実施）の総合偏差値が高い層ほど、志望校を早期に決定し、早い時期から大学受験を意識した学習を始めていることがわかる。早期からの意識づけの重要さがうかがえる結果となった。

図表5 志望校を決定した時期



図表6 大学受験を意識した勉強を始めた時期



※河合塾アンケート「2023年春The Longest Year」(2022年度塾生)より。高校3年生の回答を抽出して集計。

## 部活動・学校行事がある中でも高い進路希望を実現 入試問題研究会などを通じ高2から受験モードへ

### 埼玉県立浦和高等学校

#### 指導のポイント

- ✓ 2年次2学期が受験へと気持ちを切り替える時期
- ✓ 意欲的な生徒に刺激を受け学年全体の雰囲気を作られる
- ✓ 入試問題研究会を機に理科・地理歴史の対策も始める



進路指導主事  
秋山忠弘 先生

#### 2年次2学期よりさまざまな仕掛けにより 徐々に受験に向かう雰囲気を醸成

埼玉県立浦和高校は、東京大、京都大、東北大などの難関大に毎年多くの合格者を輩出する全国屈指の公立男子校である。部活動の加入率は約9割と高く、体育祭や文化祭、強歩大会など学校行事も充実しており、生徒たちは非常に密度の濃い3年間を過ごす。

生徒たちは「尚文昌武」の校訓のもと、まさに文武両道を実現しているが、どのように部活動や学校行事と学業を両立させ、受験へと向かっていくのだろうか。

進路指導主事の秋山忠弘先生は「本校では、2年生の2学期を受験へと意識を切り替えるタイミングだと位置づけています」と話す。

まだ部活動にも全力で取り組む時期に、生徒たちに受験生としての自覚を持ってもらうため、同校では2年次の2学期から3学期にかけてさまざまな取り組みを行っている。

#### 2年次2・3学期の取り組み

##### ●9～10月 受験準備講座（希望者）

東京大など難関大の問題を解く。対象科目は英語・数学。5回実施。

##### ●11月下旬 年次集会（学年全員）

修学旅行から帰ってきたタイミングで、模試の成績返却と併せて行う。「修学旅行も終わったし、いよいよ受験生としてスタートだ」と告知し、受験に向けた心構えなどを話す。

##### ●12月 OB講話（学年全員）

難関大に合格したOBを招待し、自身が行っていた勉強内容などについて話してもらう。

##### ●2～3月 入試問題研究会（学年全員）

LHR等の時間を使い、5回実施。生徒たちに事前にとったアンケートをもとに、東京大、京都大、医学部医学科、東京工業大、東北大、北海道大など志望大学・系統ごとに3～5名ほどのグループに分ける。

1回目は、事前に調べてきた大学の入試情報や、志望動機を共有しあうガイダンスを実施。2回目以降は各教科の教員が選定した入試問題の研究をグループで行う。

##### ●2～3月 二者面談（学年全員）

受験生としてのスタートが切れているか、1年次より毎学期実施している「進路希望調査」や「学習状況調査」なども参考にしながら、学習習慣や日ごろの学習量などについて確認する。

秋山先生は「9月に実施している受験準備講座は、部活動が終わった19時頃から開始しています。それでも例年100名以上の生徒が参加します。まずは希望者から受験に向けた雰囲気を作っていくことがねらいです。受験準備講座に参加しない200名強の生徒に対しては、進路だよりなどを通じ、受験に向けてすでに動き出している生徒がいることを知らせ、徐々に学年全体で受験に向かっていく空気を作っていきます」と話す。

また、12月に行っているOB講話も生徒の反応が非常に良いという。

## 資料 入試問題研究会 生徒アンケート（一部抜粋・編集）

## 各大学の入試問題を解いた感想

- 東大という言葉に圧倒され、手の届かない問題だと感じていたが、文章を1つずつ解読すると当たり前だが高校の範囲であり、**今まで自分たちが積み上げてきたものの集大成であることに気づき、前向きな気持ちになった**（東京大理類/化学）
- **普段の国語の授業を大切にしつつ、問題に慣れることが必要だと感じた**（一橋大/国語）
- **過去問から優先して勉強すべき単元がわかった**（東京工業大/化学）

## 全体的な感想

- どの教科も、基本的に**授業をしっかり聞き、理解することが第一**だと感じた
- どの教科も**授業の延長線上にあると感じられた**。基礎ができていないと解くのは難しいと思う
- 全体的に現状の自分の知識の定着度や演習量がどれだけ不足しているか知り、今後の学習の動機づけになった。**難関大の入試問題でも使うのはこれまでの基礎のつなぎ合わせ**でもあり、モチベーションを下げず今後も取り組みたい

※浦和高校提供資料を基に河合塾作成

「教員が話すよりも、難関大に合格したOBの経験談の方が生徒たちは熱心に耳を傾けます。この時期は、部活動を続けていて大丈夫なのか、このままの学習ペースで受験に間に合うのかといった不安を抱く生徒も出てきますが、OBが『この時期は部活動に全力で取り組んでいた』『日々の予習・復習をしっかりやっていたら大丈夫』と語ってくれることで、自分たちがやっていることは間違っていないと安心してくれます」（秋山先生）

こうして、生徒たちの意識が高まっていく中、**さらに志望校への思いを強め、学年全体で受験に向かっていくための仕掛けが、3学期に行われる入試問題研究会だ。**入試問題研究会のねらいを秋山先生は次のように語る。

「**実際の入試問題に触れ、難関大であろうと『日々の授業の延長線上に入試がある』**ということを体感してもらうことがねらいです。また、**理科や地理歴史の学習をこのタイミングからスタートしてもらうことも目的の1つ**です。本校は3年生の夏まで部活動をしている生徒が多いため、3年生から理科・地理歴史の学習を始めるのでは間に合いません」

## 学習習慣と効率的な時間の使い方がポイント

2年次の2学期よりさまざまな仕掛けがあり、生徒たちは受験生としての意識を高めていくことになるが、それまでに学習習慣が身についていること、効率的な時間の使い方を知っているということも大事なポイントであるという。

秋山先生は「日々忙しい中、いかに学習時間を作り出すかが大事です。たとえば、部活動が終わった後、自宅で机に向かうのは難しいでしょう。本校の生徒の多くは、部活動が終わった後教室に戻り、友達と勉強をしてから帰宅します。また、朝は始業の1時間ほど前に登校し、予習をする生徒も多く見られます。実際、成績が優秀な

生徒ほど部活動にも熱心な場合が多く、時間の使い方が上手です。そうした生徒が良い刺激となり、周りの生徒にも波及していきます」と話す。

## 受験は団体戦

## 仲間とともに受験勉強を乗り越える

高校の3年間という限られた時間の中で、勉強だけではなく部活動や学校行事にも力を入れる理由とは何か。

秋山先生は「私たちは、勉強・部活動・学校行事は三位一体となったときに最もその効果を発揮すると考えています。本校では、11月に強歩大会を行っていますが、50キロを7時間以内に走破するというとても大変な行事です。11月下旬の年次集會では『あんなに困難な強歩大会を仲間とともに乗り越えたんだから、受験勉強も乗り越えられる』と激励しています。また、私は生徒に『**受験も団体戦**』だという表現で伝えています。本校の生徒は、3年生の2月であっても毎日登校し、仲間とともに最後まで受験に向けて頑張ってくれます。**部活動や学校行事を通じて培われた生徒同士の絆が、苦しい受験勉強を乗り越える支えとなるわけ**です。だからこそ本校の生徒は入試直前まで学力が伸びています」と話す。

昨今、学校行事の見直しをする高校も多い中、同校ではコロナで中止・延期となっていた行事をどう復活させるか検討中だという。

秋山先生は「本校が行っていることは、少し前まではどこの学校でもやっていたことであり、王道であると思っています。**目先の受験ではなく、将来的に生徒が世界で活躍できるようにという思いで日々指導**しています。その過程の中に大学受験があるのではないのでしょうか。これからもそういう思いのもと生徒たちを指導していきたいです」と語ってくれた。

## 3年0学期がキーフレーズ 学年集会やMy志望理由書で受験モードに

### 横浜市立金沢高等学校

#### 指導のポイント

- ✓ 3年0学期集会で受験スイッチを入れる
- ✓ My志望理由書の作成が受験勉強を乗り切る糧に
- ✓ 全統共通テスト高2模試の活用で一層受験モードに



進路指導部主任  
湯地智之 先生

#### 学年全体を牽引するフロントランナーを いかに増やせるかがポイント

横浜市立金沢高校は、国公立大のほか早稲田大・慶應義塾大などの難関私立大にも多くの合格者を輩出する進学校である。自主自立を重んじる校風で「金高は全部やる」をモットーに、部活動や学校行事にも力を入れている。近年の進路実績について、進路指導部主任の湯地智之先生は次のように話す。

「入学当初は国公立大を志望する生徒の大半は横浜国立大・横浜市立大を志望していますが、全国の大学を視野に入れて検討できるよう教員も進路指導してきました。また、普段の学校生活から挑戦心を持って物事に取り組ませる指導も意識的に行っています。そうしたこともあり、難関大の進学実績が伸びています」

現在、同校の進路指導で重点が置かれているのが、1年次の初期指導である。近年、入学時の学習状況調査で約3割の生徒が家庭学習時間ゼロと回答しており、学習習慣の定着が大きな課題となっていたためだ。そこで、1年次の早い時期から、学年集会でさまざまな進路情報を提供し、生徒のやる気を引き出すように努めている。

「5年ほど前から学年ごとの進路行事・保護者向けの講演会の時期や内容の整理、統一を図ってきました。学年集会など学年一斉での指導を行った方が、生徒の理解を得られやすいためです。本校は自主自立の精神を重んじているため、『こうやりなさい』と強制はしませんが、学習計画の立て方、模試や定期試験の振り返り方、先輩

の勉強方法など、それぞれの時期に応じて情報を提供しています。生徒自身が考え、やる気になるきっかけを作るようにしています」

そうした教員の働きかけに対し、一部の生徒は敏感に反応し、実際に行動に移していくという。湯地先生は「われわれが伝えたことがすべての生徒に響くわけではありません。教員の話に反応した一部の生徒たちが自発的に勉強を積み重ね、学年全体を牽引してくれる存在となります。実際、3年生で部活動を引退した際、頑張っている友人に触発され、自分も気持ちを切り替えて頑張ろうと思ったと語る生徒は少なくありません。そのような学年を引っ張っていくフロントランナーとなる生徒をいかに増やしていくかがポイントになります」と話す。

#### 「3年0学期集会」で 受験生としてのスイッチを入れる

学年全体で受験生としてのスイッチを入れるために重要な役割を果たしているのが、2年次の12月に実施している「3年0学期集会」である。

「“3年0学期”というキーフレーズを用いながら、受験への意識を高めています。この集会では、大学で学びたい分野を生徒一人ひとりに再確認させるとともに、高校の授業の学びが入試に直結することや、まずは英語・数学・国語の学力の完成が急務になることなど、本格的な受験勉強を始める上で大切になることを伝えています。ただし、あまり焦らせてしまうと、部活動を辞めた方がいいのではないかと思います。悩む生徒が出てくる場合もあり

図表 学年通信（一部抜粋）

**「My 志望理由書」作成のすゝめ**  
～3学期の2月にみなさんに提出してもらいます～

自分の今の志望大学（学校）・学部・進路を思い浮かべてみてください。そもそも、あなたはどのようにしてその大学・学部に行きたいのでしょうか？そこに行って、どんな自分に将来なっていたいのですか？どうして「この大学」「この学部」がいいのか。どうしてそこじゃなければダメなのか。他の大学の似たような学部と何が違うのか。

**自分の「ここだけは曲げられない志望理由」、もう見つかっていますか？**

今の段階で「●●だから、絶対この大学に行きたい」という理由を完璧に答えられる必要はありません。また、無理に背伸びをしてキレイな理由である必要もありません。でもぜひ、**今だからこそみなさんにやってほしいこと**が2つあります。

①第一志望校に対する**自分の「ここだけは曲げられない志望理由」を真剣に考えてみる**こと。

→ 今これを考えておけば、モチベーションがUPするだけでなく、将来受験勉強の中で苦しい時や心が折れそうな時、必ずみなさんの気持ちの支えになってくれます。

②**そうやって考えたことを「My 志望理由書」として形にして書いてみる**こと。

→ まず「書く」作業+そのためによく「調べる」作業。2つを通して、自分の思考が整理しやすくなります。

→ どんなに心が強くてタフな人でも、メンタルがしんどい時が必ずあるはず。どうやって乗り切るかはもちろん人それぞれですが、一つの方法として、書いておいた「My 志望理由書」を読み返すのもかなり効果的です。思った以上に、自分が昔書いておいた言葉って後で読んだ時背中を押してくれるんです。

※金沢高校提供資料を基に河合塾作成

ますから、危機感をあおりすぎないように情報の伝え方には気をつけています」

### My志望理由書の作成が のちに受験を乗り切る強い動機となる

さらに受験へと目を向けるための仕掛けが「My志望理由書」の作成である。学年通信<図表>などで作成の意義について伝え、冬休みよりワークシートを作成、下書きを経て、2月上旬に提出する。ワークシートは候補となる大学・学部を3つ挙げ、学びの特徴や受験科目などさまざまな項目について調べ、多角的に比較できるようになっている。その上で第一志望校を決め、「ここだけは曲げられない志望理由」を記載する。

My志望理由書作成の意図について、湯地先生は次のように話す。

「その大学に行きたいという動機が強ければ強いほど頑張れるから、というのが一番の理由です。その時点では志望理由が明確でなく、あまり書けない生徒もいますが、真剣に考える機会を持つことで、その後の受験勉強のモ

チベーションやつらいときの支えとなります。部活動引退後の気持ちの切り替えもスムーズです」

My志望理由書の作成を通じ、志望校への思いを高めていくと同時に、より一層受験へと意識を向けてもらうため、同校では2年次の3学期に全統共通テスト高2模試を採用している。

このように、受験への意識を高めるさまざまな仕掛けが用意されているが、湯地先生は以下の点を強調する。

「3年0学期は受験生としての意識を高めるために重要な時期ではありますが、学習習慣づくり、生徒・保護者に学校の指導を信頼し支持してもらえるような関係づくりなど、3年0学期に至る前段階での取り組みが最も大切だと考えています。本校では、保護者向けの講演会を全学年毎年2回実施し、他にも三者面談、学校評価アンケートへの回答などで、さまざまな情報提供、信頼関係構築に努めています。今後もフロントランナーとなる生徒を増やしながら、『自主自立』の精神で生徒同士がお互い高め合っていけるよう支援したいと思います」と語ってくれた。

## 2年次2・3学期の模試を活用し 受験に向けた雰囲気を作っていく

### 岐阜県立加茂高等学校

#### 指導のポイント

- ✓ 模試の受験をきっかけに受験モードへと切り替え
- ✓ 2年次の3学期から入試レベルの模試を導入
- ✓ 生徒の入試対応力を早期に測り3年次の指導へ生かす



進路指導主事  
水口智人 先生

#### 早期指導と積極的な情報提供で 生徒の受験への意識を高める

岐阜県の中南部に位置する美濃加茂市にある岐阜県立加茂高校は、約9割ほどの生徒が4年制大学へと進学する。進学希望先としては、岐阜大や名城大など地元や名古屋圏の大学を挙げる生徒が多いという。同校では、総合・推薦型選抜を受験する生徒が増加傾向にあり、合格実績も着実に伸ばしている。その背景を進路指導主事の水口智人先生は次のように語る。

「本校はのんびりしたタイプの生徒が多く、入試に関しても積極的に情報収集する生徒は多くないため、早めの指導と情報提供を心がけ、受験への意識を高めるように努めています。教員からの働きかけもあり、総合・推薦型選抜も貴重な受験機会と認識し、チャレンジする生徒が増えているのでしょう。また、本校は資格取得や探究活動などに力を入れているため、教科学力だけでなく、探究活動などを通して身につけた力が評価される選抜は、本校の生徒にとって相性の良い選抜方法でもあります。その実績が生かせるという意味でも、総合・推薦型選抜の受験を積極的に勧めています」

#### 1・2年次の探究活動の流れ

探究活動の流れを見ていこう。まず1年次では自己探究をテーマに、生徒自身が何に向いているのか、どんな適性を持っているのかを探究すべく、さまざまな活動を行う。特徴的な取り組みは「地域の大人と語る会」であ

る。地域の人々と語る中で、さまざまな仕事の内容や地域課題を大人目線で知るといったものだ。その体験を通じ、自分自身の興味・関心や目標が少しずつ見えてくる。今年度より河合塾の「学びみらいPASS」も導入し、さらなる自己理解を促していく予定だ。

2年次の前半は具体的な大学・学部調べを中心に行う。「本校の生徒は地元志向が強いので、なるべく日本全国に目を向け、広く調べるように伝えていきます。1・2年次は志望を高く持って、自分の興味・関心から志望校を検討してほしいと思います」（水口先生）

2年次後半には美濃加茂市役所と連携した活動も進めており、農林業、観光、あるいは外国籍の人々が数多く居留している多文化共生の問題など、多様な観点から地域の課題を探っていく。そして、3学期には志望理由書の作成を行う。大学を調べ、志望理由を言語化することで、本格的に志望校を検討し、志望理由を考えてもらうきっかけとすることがねらいだ。

#### 2年次の秋から冬に行われる模試を通じ 受験意識を高めていく

同校では教員から働きかけることにより、生徒たちが受験へと目を向けていくというが、どのような働きかけを行っているのか。水口先生は、まずは意識の高い生徒から受験に向けた雰囲気を作っていくことがポイントだと話す。「教員は早め早めの指導を心がけていますが、生徒全員が思い通りになるわけではありません。まずは意識の高い生徒に、全統高1模試、全統高2模試の受験

表 2年次の進路・受験指導関連行事(2023年度)

時期	内容
5月	大学研究
7月	大学説明会
8月	第2回全統高2模試
10月	第3回全統高2模試
11月	模試受験
12月	学部学科別講座
	大学説明会
1月	模試受験
	全統記述高2模試
2月	全統共通テスト高2模試
	志望理由書作成
3月	合格体験講話

(一部の模試は希望者)

※取材内容を基に河合塾作成

を促したり、オープンキャンパスやオンライン説明会にも積極的に参加するよう声をかけ、受験へと目を向けてもらうようにしています」

少しずつ受験を意識する生徒が増えていく中、学年全体で受験に向かうための雰囲気づくりに役立つのが、模試の受験である。

水口先生は「2年次の11月頃から受験生としてのスタートラインだと考えています。ちょうどその時期に5教科揃った模試を学年全員に受けてもらいますが、これを機に受験モードになってもらいたいというねらいがあります。この模試は修学旅行から帰ってきた後に受験するのですが、大きな学校行事を終えたことがひとつの節目となり、気持ちを切り替えやすい面もあるでしょう。事前に模試の過去問などを配布し、しっかり準備をして真剣に臨むように促しています」と話す。

### 全統共通テスト高2模試の成績を活用し 3年次4月に成績検討会を実施

2023年度からは、さらに受験モードへと切り替えを促すため、2年次3学期に全統共通テスト高2模試を採択した。採択の理由を水口先生は次のように話す。

「生徒の入試対応力を早期に確認することが採用の理由です。従来から3年次は全統模試を中心に受けていますが、2年次の3学期に前倒しすることにしました。年度によっては、3年生に進級する際に新しい教員が担任

を受け持つ場合もありますが、担任となつてすぐ入試対応力を測った模試成績が確認できるので、スムーズに指導することができます」

また、全統共通テスト高2模試の成績資料は3年次に行われる進路検討会でも活用する予定だ。

「本校では4月、7月、9月、11月の4回進路検討会を行っています。1回目の進路検討会は、全統共通テスト高2模試の成績をもとに行います。進級してすぐの時期に学年団で模試の成績分析を行うことで、学年全体の指導方針に生かすことができます。また、2年生から3年生にかけての成績の推移を確認でき、深い分析・検討をすることができます」

### 今後も早め早めの指導を行い 生徒の希望する進路実現につなげる

今後の展望について、水口先生は次のように話す。

「美濃加茂市が主催の市民参加型のイベントに自ら参加するなど、探究活動を通じ積極的に行動する生徒が多くなってきたように思います。今後は、探究活動で得た気づき、自身の興味・関心をもとに広い視野で志望校を検討し、納得のいく進路選択をしてもらいたいです。本校の生徒は地元志向が強く、電車で通える名古屋圏の私立大だけを受験するケースも見られますが、もっと全国に目を向ければ、自分に合った特色ある教育を行っている大学も見つかるはずですよ。進路選択の幅を広げるためには保護者への情報提供も大切です。本校ではオンライン等も活用しながら、3年次の5月、6月、9月に『保護者進路説明会』を実施しています。特にネックになりがちな経済的負担については、遠方の国公立大と地元私立大との経費の比較や奨学金制度など、きめ細かな情報提供を心がけています。保護者にも遠方の大学に目を向けてもらえるようにしたいと考えています」

生徒の希望する進路を実現するため、これからも早め早めの指導を行っていくという。

水口先生は「本校の生徒たちは、せっかく探究活動など特色のある取り組みをしているので、生徒の積極性をさらに伸ばし、そこを生かした形で総合・推薦型選抜も活用してもらいたいと思います。そのためにも、早くから志望校・受験へと意識を向けてもらえるよう、頑張りたいです」と語ってくれた。

## 2年次2月のSSH発表会が受験への起爆剤 探究活動で育む汎用的な力は受験にも生きる

### 兵庫県立加古川東高等学校

#### 指導のポイント

- ✓ 受験にも生きる汎用的な力を探究活動を通じ育成
- ✓ 探究活動による大学での学びへのモチベーションアップ
- ✓ 学びの設計書の作成でさらに受験への意欲を高める

#### 1・2年次の探究活動が

#### 受験意識の向上や受験勉強にも生きる

兵庫県立加古川東高校は、毎年東京大・京都大など最難関国公立大にも多数合格者を輩出している進学校である。探究学習やSTEAM教育に力を入れており、今年度でSSHに指定され18年目を迎える。同校では育てるべき生徒像を「正解のない未来を切り拓く人材」と定め、探究活動を軸としたカリキュラムマネジメントを行っている。

3年間の探究活動は<図表1>の通りであるが、1・2年次に行う探究活動が、**受験意識の向上、受験勉強にも生きていくという**。SSH担当の新友一郎先生は、2年次2月に行われるSSH発表会が、生徒が大学で学ぶ意義を理解し、大学での学びへのモチベーションの向上に大きな役割を果たすと話す。

「本校では毎年2月1日に1・2年生全員が集まり、SSH発表会を行います。発表するのは一部の生徒ですが、聞いている生徒も臆せずどんどん質問をします。大学での学びはこうした探究活動の延長線上にあるんだということを感じ取り、もっとワクワクする学びをするために、

図表1 普通科の探究活動の概要

探究Ⅰ	研究に必要な知識・技能を、ミニ探究などを通して体験的に身につける。
探究Ⅱ	グループ研究をし、テーマ設定から発表まで、一連の研究過程を経験する。
探究Ⅲ	探究での学びを学びの報告書にまとめる。

※加古川東高校提供資料を基に河合塾作成



SSH担当  
新友一郎 先生



STEAM担当  
谷口正明 先生



探究担当  
傍士知哉 先生

大学へ向けた勉強をしようと自覚していきます」

STEAM担当であり2022年度は3年生を受け持っていた谷口正明先生は「問いを立て、課題解決策を考える上で、英語や数学など教科の知識もおのずと必要になります。探究活動をしていく中で、自分が何のために勉強をするかが掴めてきているように感じます」と話す。

ほかにも、2年次2学期から3学期にかけ定期考査の問題を変えていく教科もあるという。探究担当の傍士知哉先生は「私が担当する国語でも、1年生のときは知識を問う問題の比重を高くしていますが、2年生からは少しずつ思考力・判断力・表現力を問うタイプの問題の比率を上げていくようにしています。また、2年次12月に実施する考査では、入試問題を参考にしながら、少しひねりを効かせた問題も用意し、最終的に到達してほしいレベルをこの時期から提示しています」と話す。

#### 探究活動でリテラシー・コンピテンシーを伸ばし 受験にも通用する力が養われる

探究活動で培われた力は間違いなく受験勉強にも生き

図表2 学びの設計書（一部抜粋）

「探究Ⅲ」の目標

- ・世の中に関心を持ち、必要な情報を客観的な視点をもとに収集することができる。
- ・あるべき姿と現実のギャップを分析し、解決策を提案・協議することができる。
- ・社会に関与する姿勢を持ち、自分の考えを他者にわかりやすく伝えることができる。

■まず発表内容の要旨をまとめます。10年後、20年後の自分を思い浮かべて、なぜその大学で学びたいのか、そのために高校で何を頑張ってきたのか、箇条書きで書き出してみよう。

- ①大学卒業後、大学で学んだことをどのように生かしたいか。
- ②大学生活で、何を目標し、どのように学びたいか。
- ③そのために、高校で学んだことは何か。

■大学に提出する志望理由書のつもりで、上に書いた内容を深く掘り下げてみよう。

- ※話し言葉ではなく、書き言葉で書くこと。書き終わったら誤字脱字がないか、セルフチェックしなさい。
- ※上に書いた順番と逆に書いても構いません。（高校で学んだこと→大学で何を学びたいか→将来の自分）

学びの設計書	( )	大学	( )	学部	( )	学科志望
--------	-----	----	-----	----	-----	------

.....

以下省略

.....

※加古川東高校提供資料を基に河合塾作成

ているという。

新先生は「驚くことに、生徒たちが過去問を解くと、東京大や京都大の問題であったとしても『探究より簡単だ』と感じるそうです。探究活動を通じて、世の中にはもっと難しく答えのない問題があることを知っている

ので、『入試問題には答えがあるんだから、探究より易しい。自分たちは解けるはずだ』と前向きに入試問題に取り組んでいます。また、本校では『学びみらいPASS』<sup>(注)</sup>を毎学年受験し、リテラシー・コンピテンシーの伸びを見ていますが、学年が上がるごとに各数値は向上しています。教科学力に加えて、リテラシー・コンピテンシーといった資質・能力も意識して伸ばしているからこそ、今の大学入試で通用し、進路実績が向上しているのでしょう」と話す。

傍士先生も「自ら問いを立てる経験を数多くしてきているため、過去問の添削を生徒が持ってくる際も設問の意図を自身がどう捉えたかをしっかりと言葉にします」と話す。入試問題に取り組む際も、出題の意図に自然と意識が向かうなど、探究活動は副次的に受験勉強に生きているようだ。

### 入試直前期に向けてさらにモチベーションを高める「学びの設計書」

さらに大学進学へのモチベーションを高め、入試直前まで学力を高めていくのに役立つ取り組みが、3年次6～8月にかけて作成する「学びの設計書」<図表2>である。同校の「学びの設計書」は、京都大の特色入試で課される「学びの設計書」をモデルに作られており、高校での学びを大学での学びへとつなげる目的で実施している。

まず6～7月にアウトラインとして「学びの設計図」

を作成し、10年後、20年後の自分を思い浮かべ、なぜその大学で学びたいのか、そのために高校で何を頑張ってきたのかを整理する。そして8月に向け、自身が志望する大学・学部の「学びの設計書」として志望理由をまとめ、9月下旬から10月に管理職を含む担任以外の教員に1対1でプレゼンテーションを行う。教員はその内容について質問し、最後に感想をフィードバックする。

その効果について谷口先生は「学びの設計書を作成することで、生徒が改めてこれまでの取り組みを振り返り、何のために大学で学ぶのかを考える機会となります。また、生徒は自分の進路について考えたことに対し、『いいね、面白いね』と教員から肯定的なコメントをもらうと、とても励みになるようです。その結果、自己肯定感が上がり、学習意欲や進学に対する意欲が高まるのでしよう。実際、生徒たちの夏休みが明けてからの成績の伸びや入試直前期に向けた追い上げは目を見張るものがあります」と話す。

最後に、これからの進路指導・学習指導の方向性についてうかがうと、新先生は次のように話してくれた。

「大学入試だけでなく、社会のあり方や、世界の中の日本の位置づけも変わってきているので、高校も従来のような詰め込み教育をしてはだめだという危機感を持って指導しています。『大学やその先に送り出すにあたり、どんな力を身につけさせる必要があるか』ということを真剣に考え、これからも指導していきたいです」

(注) 河合塾の「学びみらいPASS」のPROG-Hでは、学校や社会で求められる汎用的な能力（ジェネリックスキル）について、知識を活用して課題を解決する力（リテラシー）と経験から身につく行動特性（コンピテンシー）を測定している。

## 2年生3学期からは受験生である意識を強く持ち 計画に基づく学習を始める

### 河合塾

#### 指導のポイント

- ✓ 学習計画を立て、実行記録を残し振り返ることが大切
- ✓ 生徒が自分で考え行動できるようアドバイスする
- ✓ 模試の答案を見ながら、やるべきことを生徒と考える

#### 2年生3学期は受験学年としての自覚を持ち 入試に向けた学習計画をスタートさせる時期

河合塾では、第一志望への合格を実現するとともに、その後の将来に役立つ主体的な学びの姿勢を養成し、生徒の自己実現をサポートすることを教育方針として掲げ、一人ひとりの状況にあわせた自立的な学習を促す指導を行っている。

第一志望合格という目標を意識することは重要だが、最終的なゴールだけでは具体的な行動につながりにくく、モチベーションの維持も難しい。そこで、学年や時期に応じた段階的な到達目標を設定し、指導している。

2年生の3学期は、高校生にとって、志望学部を決定し、志望校を絞り始める時期だ。河合塾では、この時期の目標を「受験学年としての自覚を持ち、入試に向けた学習計画をスタートさせる時期」（新高3生スタート学期）としている。

受験まで1年を切るこの時期から、受験を意識した学習をスタートしてもらうために重点を置いているのが学習計画の立案・実行・見直しである。

生徒が自分一人で自分にあった学習サイクルを確立するのは難しいため、河合塾では一人ひとりの課題・特性を踏まえた上で学習計画の立案をサポートしていく。そして、計画に基づく学習を着実に実行できるよう、日々の学習状況を見守り、アドバイスを行う。定期的に学習状況・学習成果を振り返り、その都度課題を明確にしながら、学習計画の見直し、再立案を行うよう支援していく。

#### 学習計画のポイント

##### 1 目標設定・計画立案

- ✓ 学習課題を認識しているか
- ✓ 予習→授業→復習のサイクルを回せる計画となっているか
- ✓ 学習時間は毎日コンスタントに確保できているか
- ✓ 自分の特性を客観的に判断し、無理のない計画を立てられているか
- ✓ 苦手科目に固執しすぎていないか（得意科目をおろそかにしすぎていないか）
- ✓ 優先順位をつけられているか、優先順位は妥当か
- ✓ 模試の復習が織り込まれているか
- ✓ 学校の定期テストを考慮しているか
- ✓ 土日の活用ができているか
- ✓ 睡眠・休息を適度に取りれる計画となっているか

##### 2 実行記録・振り返り

- ✓ 学習記録をつけているか
- ✓ 計画通り実行できているか
- ✓ 学力が身につけているか、授業内容は定着しているか
- ✓ 計画通りにできなかった場合、自身で理由を把握しているか
- ✓ 学習している教科・科目、分野に偏りがいないか

### 学習記録をつけることで

#### 学習量や学習時間、教科バランスが「見える化」

計画を立てる際は「第一志望に合格するには、限られた時間の中でやるべきことの優先順位をつけながら計画を立てることが必要であり、受験勉強は学習計画を立てることから始まる」と意義を伝えている。そして、学習管理ツールで日ごろの学習状況を確認し、面談などを通じ、助言していく。

計画を立てた当初は、実行するのにどの程度時間がか

かるか想定できておらず、計画通りに進められない場合が多いため、学習記録をつけることで学習量、学習時間、教科バランスなどを「見える化」し、計画の見直しをしていくことがポイントとなる。

学習計画の見直しをする際は、日々の学習状況だけでなく、模試や学校の定期テストなどの学習成果も踏まえて振り返りを行い、計画の見直しをすることが望ましい。河合塾では全統模試ごとに、目標を設定し、模試受験後・成績返却後に振り返りを行い、計画の見直しをするようアドバイスしている<コラム参照>。

### Column 模試受験後の指導のポイント

#### 学校法人河合塾 理事 角野俊彦

模試は受験した後が大事です。模試の成績表や学習の手引き（解答・解説集）などから得られるものはたくさんあります。たとえば、マーク式である共通テスト模試の成績表には、1問1問の正答・誤答も載っています。各大問の前半部分は基礎レベルの設問が多いため、ここの誤答は優先的に復習すべき問題です。記述式の模試であれば、数学の小問集合問題が基礎事項にあたります。

学力を伸ばすためには、基礎事項を確実に理解することがポイントになりますが、ことばの意味、定理・公式、計算など「わかったつもり」「何となく」

で理解したつもりになっている事項は意外と多くあります。また、国語の学習の手引きには、『普遍』『相對』など、本文中に登場した重要語句の説明がされていますが、この箇所にも注意を払い、丁寧に目を通して生徒は多くはいません。

基礎事項をおさえるということは、曖昧な知識を1つ1つ突き詰めていくということです。ただ模試の復習や解き直しをするように言っても、忙しい生活の中では後回しにされがちです。生徒と答案を一緒に見て、なぜ間違えたのかを聞き出し、やるべきことを本人に納得して学習してもらうことが大切です。

### WEB限定コンテンツ 模試を活用した指導のポイント

教育関係者のための情報サイト「Kei-Net Plus」では、標記の記事を10月下旬に掲載予定です。模試を活用した学習指導のエキスパートによる対談記事です。あわせてご覧ください。

#### 対談内容

- ・ 模試を受験する意義
- ・ 模試を受験する上での心構え
- ・ 模試受験後の指導
- ・ 模試の復習方法



(左から)  
河合塾麹町校舎長 神本 優  
学校法人河合塾理事 角野 俊彦  
河合塾仙台校舎長 渡邊 貴吉  
Guideline編集担当 白川 恵子

ケイネット プラス

